自分たちのMBA

12人それぞれの歩き方

はじめに

　現在ＭＢＡをはじめ、多くの社会人向けのインターネット専門の教育・自己啓発プログラムが提供されている。いずれも自分を変革したい、あるいは仕事の壁を乗り越えたいと考える人が増えていることが背景にあるのであろう。多忙なビジネスパーソンにとってありがたいことである。なかでも大前研一氏の発案したＢｏｎｄ－ＢＢＴ ＭＢＡプログラム（Bond University BBT Global Leadership MBA Program　本書では以下「Ｂｏｎｄ－ＢＢＴ」と表記する）は、日本国内ではインターネット大学院の先駆者的存在であり、かつオーストラリアのボンド大学のエッセンスを融合した、他に例をみない洗練されたＭＢＡプログラムに仕上がっており、その評価は高い。

　それはこのプログラムを受講し卒業した多くのビジネスパーソン達の成果が見え始めていることに表れている。起業、転職、昇進、会社改革、社内ベンチャーなどその進路は様々である。一方、「ＭＢＡって役に立つの？」「所詮机上の学問でしょう？」「それで年収上がるの？」という言葉は多く耳にする。その答えは、ＹｅｓでもＮｏでもある。それは、この本から皆様方が見出してほしい。

　日本は数年前まで「ある一定の水準で暮らすには最も恵まれた国」であった。親の言うことを聞いて、文部科学省の教育を受け、受験勉強を勝ち抜く。決められたレールを走り、「偏差値をあげるコツを体得したものが勝利者」となっていた。一転、その成功ルールが破綻している現状に目をむけなければならない。大企業でも倒産する可能性があり、一生同じ会社で安泰という保障はなくなってきている。中国、インドでは多くのエリートが米国留学し、母国に戻って起業する、そして日本にも多くの優秀な外国人が流入している。

　勤勉で集団能力の高い日本人は、高度経済成長期で成功をおさめ日本は経済大国となった。しかし現在、多くの社会変革が日本を襲い、われわれビジネスパーソンは変革を余儀なくされている。そう、個人での高い能力が要求され

始めているのだ。これまで日本で行われてきた教育は、前例があり、あらかじめ明示された目標に向かって効率よく進む方法に重点が置かれていた。しかし、21世紀に求められる教育は異なる。正解のない、潜在する課題を自ら見つけ、その課題の解決策を立案し、そして行動を起こすことを身につけるための教育が求められている。そう、自ら考え抜く事が必要なのだ。

人は、自らの人生のなかで、もがき、苦しみ、考え抜いた経験は、そう多くはない。徴兵制度もない日本では、規律のある厳しい精神修養を経験することも少ない。多くの社会人は大学・大学院卒業後、教育を受ける機会を喪失している。だから、仕事以外で汗をかくことも少ない。もがいて、もがいて、もがいて、そして汗をかき苦しみ抜いた経験こそが自分の糧となるのである。少なくともＢｏｎｄ－ＢＢＴは「そういった場所を提供するプログラム」と捉えて頂きたい。それは自分の血となり肉となり、人生を支える「生きたエッセンス」となり得るのである。

本書は、少しだけ先にＢｏｎｄ－ＢＢＴを経験し、その成果をだしている先人からのメッセージをまとめたものである。よくある形だけの体験談やＭＢＡを売り込むものではない。修了生が良くも悪くも本音をさらけだし、自身のエッセンスをまとめあげたものである。本書が皆様方の糧となり、そしてＭＢＡを志すきっかけとなるなら、われわれにとってこんなに嬉しい事はない。

代表者　渋谷　寛

■目次

藤野 祐美　人材開発コンサルタント・経営者 …… 5
渋谷 寛　IT Senior Market Analyst …… 23
永田 義昭　システムアナリスト …… 41
宇式 伸介　リゾート運営 …… 59
武藤 希　Customer Relationship Executive …… 81
吉田 尚子　経営者 …… 99
藤本 正雄　産業カウンセラー …… 117
井生 俊介　システム開発監査役 …… 137
村上 路枝　デザインコンサルタント …… 159
中西 啓　事業開発営業 …… 179
後藤 智　ソフトウェアエバンジェリスト …… 197
北川 直樹　時計修理マイスター・経営者 …… 217

藤野 祐美　人材開発コンサルタント・経営者

誰もが、かけがえの無い価値を持っています。知の体系であるＭＢＡは無限の可能性を導きます。

ふじの ゆみ●大阪府出身。株式会社Ｙ’ｓオーダー代表取締役。
ミノルタ株式会社（現コニカミノルタ株式会社）にて、国内外市場に対する商品販売企画・販売支援に従事した後、プロクター・アンド・ギャンブル・ファー・イースト・インク社にて国際人事業務に従事。その後、世界最大の養殖飼料会社であるオランダ資本企業ニュートレコ社の日本法人立ち上げに参画。企業立ち上げから組織構成まで、オープニング業務全般を担当。本実績を基盤に、更に関連会社２社を立ち上げ、取締役に就任。アジア太平洋地域人事統括として人事戦略構築から実践に至るまでアジア太平洋地域の人事業務全般を統括の後、独立。
株式会社Ｙ’ｓオーダーを立ち上げ、現在、各種企業・団体へ人材開発・組織開発コンサルティング業務を展開中。企業理念である「誰もがかけがえの無い価値を持っている」のもと、理論＋実体験＋カウンセリング手法を融合した独自のスタイルで、人材育成に取り組む。
産業カウンセラー・心理相談員・２級キャリアコンサルティング技能士・キャリアディベロップメントアドバイザー・メンタルヘルスマネジメントⅠ種　マスターコース合格。著書に「上司取扱説明書～MBA 流ボスマネの極意～」同友館、2011 年。

北はノルウェーから、南はオーストラリアまで出張三昧の毎日であった

私だけついていけない

「次は escrow でいこう！」

職場で普通に交わされる話題がわからない。

オランダ系企業で勤務していた私が、同僚のマネジメント仲間が交わす話題についていけないと感じることは、一度や二度ではありませんでした。仲間が当たり前に口にする用語がわからない。同じ問題を前にして、矢継ぎ早に解決案を提示し、議論し始める彼らの思考スピードについていけない。彼らと自分の間には明らかな力の差がありました。

それなりに書籍で勉強したり、グロービスなどのセミナーにも参加していましたが、いわゆるグローバルビジネスの前線でのマネジメント現場においては、自分が力不足であることを痛感する毎日が続いていました。

自分と優秀な仲間との違いを考えた時、多くの違いの中でも、最も顕著であったこと。それは、ＭＢＡホルダーか否かということでした。彼らに追いつきたい、肩を並べて仕事をしたい。そんな思いから、ビジネススクールでの勉強を検討するようになりました。

在学中には、大前氏との授業での
やり取りが書籍として出版された

何を誰と、どう学ぶのか?

ビジネススクールで勉強したい!。とはいえ、今の仕事が面白い。となると、働きながら通うしかない。実際、欧州の同僚には、働きながら学んでいる仲間が何人もいましたので、自分もこのスタイルを取るべく、学校の検討に入りました。しかしながら、当時日本のビジネススクールは、フルタイムか、夜間、または土日に通学を必要とするものばかり。日本と欧州・アジアを休み無く飛び回っていた私の仕事スタイルには、とても合致するものではありませんでした。

中にはレスター大学のような、日本に窓口のある通信制のビジネススクールもありましたが、勉強すると同時に、仲間とのネットワークも培っていきたいと考えていた私には、一人机に向かって寡黙に勉強を進める従来の通信スタイルは、触手の伸びるものではありませんでした。改めて考えてみると私は、MBAという学位よりも、何を誰とどう学ぶかというプロセスへのこだわりが強かったのです。特にMBA仲間のネットワークの素晴らしさについては、実際にMBAホルダーたちから、常々聞かされていたことでもありました。MBAの醍醐味は、知識や経験だけではなく、そこで培うネットワークにあるという彼らの話は、非常に説得力がありました。実際に彼らに、世界各

スタディーツアーの唯一の息抜きが毎晩の食事だった

地に広がるMBAホルダーネットワークの紹介を得て、進めた仕事もいくつもありましたので、この点にはこだわりを持ちたいと考えていました。

欧州の情報が入手しやすい環境であったこと、また、フレキシブルな通学スタイルがとれる学校がいくつもあったことから、欧州の学校にしようかと気持ちを固め始めましたが、やはりここでもネットワークへのこだわりがひっかかっていました。将来のキャリアを考えた際、拠点を日本におきながらグローバルビジネスに関わっていきたいという自分としては、〝欧州拠点でネットワークを構築するよりも、日本拠点でのネットワークを構築するべきではないか？〟と考え始めたのです。

とはいえ、日本のビジネススクールを選ぶことにも、躊躇がありました。学習スタイルももちろんですが、グローバル化が必然の流れである中、同質性の高い日本人同士で日本語で議論をし、学ぶことの意義が、なかなか感じられなかったのです。

ニュースは突然、やってきた

そんな時にタイミングよく、Ｂｏｎｄ－ＢＢＴの開講という情報を入手しました。20代のはじめに「企業参謀」を読んで以来の大前研一

ファンであった私にとっては、見逃せない情報でした。これまでにないeラーニングや集中的なオーストラリアでのスクーリングというスタイルは、仕事との両立には理想的です。更に、相当数の授業が英語であるということが決め手でした。まさに探していたプログラムが目の前に現れたのです。とはいえ、全く前例の無い学びのスタイル。いくらシステムが素晴らしくとも、そこで共に学ぶ学生はどうなのか？

ひいきめにみても、同質性の高い、同世代の男性の集まりではないだろうか？　この不安が払拭できなかった私は、1期生としての入学は見送り、学生の方々の様子をまずは、拝見することとしました。そして3ヵ月後、私が出した結論は、〝これが、私が探していたビジネススクールだ！〟と言うものでした。先輩となる1期生の面々は同質性が高い集団どころか、申し分の無い、個性派の魅力的な面々だったのです。

両立は甘くない

ついに理想のMBAプログラムを見つけた！　意気揚々と2期生として入学を果たしたものの、心中には期待と同じくらい、もしくはそれ以上の不安を抱えていました。

こんなに仕事が忙しいのに、両立できるのか？　昔から数学が苦手

なのに、ＢＡＭ（ビジネス統計）なんて大丈夫なんだろうか？　そんな、私の支えになったのは、やはり欧米のＭＢＡホルダーたちでした。彼らの「ＭＢＡは自分のペースでやるもの」というアドバイスは、強い後押しとなりました。「そう、誰の強制でやるものでもない。自分のペースで納得する形で学べばいいのだから」自分に言い聞かせ決意をしました。立場上、会社に学費負担をリクエストすることも可能でしたが、拘束の元で学びたくないと言う気持ちから、自費での受講を始めました。

地方在住ゆえの悩み

入学早々、私が直面した問題は、入学前は想像もしなかった孤独との戦いでした。Ｂｏｎｄ－ＢＢＴの看板プログラムでもあるアントレプレナーシップ（Entrepreneurship ＝起業家精神）が一番初めの受講プログラムでしたが、このプログラムでは、４～５人でグループを編成して、起業家に実際にインタビューをするという課題がありました。

ｅラーニングが売りのＢｏｎｄ－ＢＢＴとはいえ、実際にグループワークをするとなると、自宅や勤務先が地理的に近い学生同士でグルーピングが始まるのです。「横浜在住の人、メンバー募集中です」、「丸の内周辺勤務の方、あと2名募集中です」。そんなメッセージをい